



アメリカの放送産業を開拓したデイヴィッド・サーノフ

(一八九一—一九七一)

### 無線通信時代の登場

一九世紀の最後の一〇年間は無線について様々な発見が相次ぎ、電波で遠隔の場所と通信できる技術が開発されます。実用に貢献したのはイタリアのG・マルコーニで、一八九七年にマルコーニ無線電信会社、一九〇〇年にマルコーニ国際海上通信会社を設立、ヨーロッパを中心に無線通信サービスを提供します。そして一九〇一年にはカナダ東端からイギリス南西のコーンウォールまで大西洋上を横断する通信に成功しました。

その結果、多数の船舶が無線通信設備を搭載し、洋上から陸地への通信だけではなく、船舶と船舶の通信も可能になりました。その重要な役割を社会が認識したのが豪華客船タイタニックの事故でした。新造された四万六〇〇〇トンのタイタニック(図1)は一九一二年四月一〇日にイギリスのサウサンプトンを出航、大西洋横断新記録を目標にニューヨークを目指しました。そして四月一四日の深夜に運命の海域に到達します。

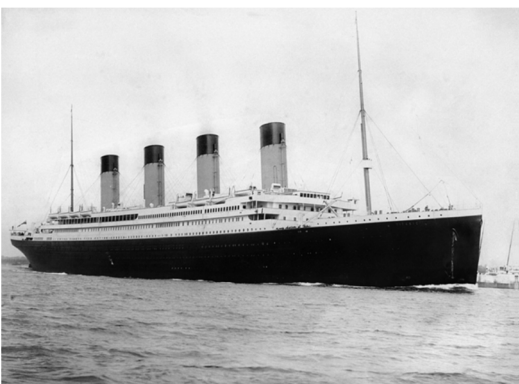


図1 豪華客船タイタニック

そのとき船員が前方に冰山を発見しますが、一帯は濃霧の発生しやすい場所ので、発見したときには回避はできず衝突してしまいました。タイタニックは遭難信号を発信しますが、現場から二〇キロメートル付近にいた船舶の通信技師が就寝していたため救難信号を受信できず、それ以外の船舶は数百キロメートル遠方を航行しており到着に時間がかかり、一五〇〇名以上が犠牲となる海運史上有名な惨事になってしまいました。

この事故現場での無線の交信をアメリカで受信していた人物がいました。マルコーニがニューヨークのマンハッタンの百貨店内に設置した無線通信施設の技師が遭難現場付近に接近していた客船オリンピックが発信した「客船タイタニックが冰山に衝突、沈没しつつあり」という信号を傍受したのです。この二三歳の若者は遭難現場付近で船舶が交信する無線通信の内容を傍受して全米に中継し一躍有名になりました。

### タイタニックの悲劇を中継

この若者デイヴィッド・サーノフを今回は紹介します。サーノフは現在ではベラルーシであるロシア帝国のベロルシアの首都ミンスクの付近の寒村シュテトルのユダヤ人家庭で一八九一年に誕生しました。当時のロシア帝国では多数の下層階級の人々が国外に流出していました。一九世紀後半のロシア帝国の人口は約一億人でしたが、毎年一〇〇万人近い人々が国外に脱出し、サーノフの父親も一八九六年にアメリカに移住しました。

四年が経過し、ロシアに残留していた家族は父親の生活するニューヨークのロウアー・マンハッタンのイーストエンドという下層階級が集中している地域に移住しましたが、父親の収入は一家の生活を維持できるほどではなく、サーノフは街角で新聞を販売して生活します。しかし若者の時代から商才のあったサーノフは新聞をまとめて購入して各戸に配達する人々に再販する商売を開始し利益をあげるようになります。

そして一六歳になった一九〇六年に、無線通信を発明したマルコーニが経営するアメリカ・マルコーニ無線電信会社に給仕として入社し、マルコーニから電信機械の使用法方法だけではなく、会社経営の仕組みなども勉強していきます。有能であったため、ブルックリン地区の無線電信局責任者、さらにマンハッタン地区のワナメーカー百貨店内に設置された無線電信局通信士に昇格、そこで運命の機会に出会うことになりました。

前述のように、一九一二年四月一五日の深夜、沈没しつつある汽船タイタニックの乗客の救助に到着した客船オリンピックが発信した無線を受信したのがサーノフでした。最初に受信してから丸三日間、サーノフは不眠不休で救難活動に従事している

船舶の発信する電波を受信し社会に伝達しました。当時の第二七代タフト大統領はサーノフが受信する無線を邪魔しないように、マンハッタンの無線使用を制限したほどでした。

### RCAの総支配人に就任

サーノフの奮闘の効果は絶大で、無線通信は物珍しい科学技術ではなく、航海の安全にとって重要な手段だという理解が浸透し、一定規模以上の船舶には無線装置と救難信号SOSを発信する装置の設置、そして専門の無線技士が乗船することが法律によって義務とされるようになりました。このような無線の役割が注目されるようになって、多数の人々に一斉に情報を伝達するラジオ放送のアイデアが登場してきました。

そのような背景から一九一九年に、ジェネラル・エレクトリック（GE）が中心となってウェスティングハウス（WH）、アメリカ電信電話会社（AT&T）というアメリカを代表する電気機器や通信関連の企業が出資してラジオ・コーポレーション・オブ・アメリカ（RCA）が設立されました。この会社にはアメリカ・マルコーニ無線電信会社も参加したため、そこに所属していたサーノフはRCAの総支配人に任命されます。

ここでもサーノフは将来を見通す才能を発揮しました。当時の無線通信は特定の地点から特定の地点へ情報を伝達する通信手段と理解されていましたが、これを特定の地点から多数の人々へ一斉に情報を伝達する放送手段に拡大したのです。当時は電波の利用に厳格な規制がなかった時代で、サーノフは次々と各地の電波の周波数帯を確保し、一九二六年までに全米を一体とする放送ネットワークを構築してしまいました。

### アメリカ最初の放送会社NBC

このネットワークを運営する会社はNBC（ナショナル・ブロードキャスティング・コーポレーション）と名付けられ、アメリカ全域に番組を提供する最初の放送会社としてRCAの下部組織となりますが、現在のアメリカの三大放送ネットワークの一人でもあります。このような斬新な事業発想と的確な経営手腕を評価され、一九三〇年にサーノフはRCAの社長に就任し、次々と新規の事業を開拓していきます。

この目覚ましく発展していく分野には当然、競争相手が登場します。CBS（コロンビア・ブロードキャスティング・システム）です。一九二七年に創設された放送会社UIB（ユニテッド・インデペンデント・ブロードキャスターズ）を購入したW・S・ペイリーが名称をCBSに変更したラジオ放送会社で、全米各地の放送会社を

次々と買収して全米にネットワークを形成してNBCに対抗する放送会社になります。

それに対抗するため、サーノフはNBCの放送内容を文化番組や教養番組を中心とすることにし、本人は特別に音楽に関心があったわけではありませんが、フィラデルフィア管弦楽団やボストン交響楽団の演奏を放送して人気を獲得しました。そこでさらに、一九三七年にイタリアの名指揮者アルトゥーロ・トスカニーニを首席指揮者とするNBC交響楽団を組織してスポンサーの支援なしの自主音楽番組を放送します(図2)。



図2 トスカニーニの指揮するNBC交響楽団

この番組は聴衆から支持されただけでなく、放送された音楽番組をレコードにして発売して会社の経営にも貢献することになりましたが、さらなる効果がありました。一九三〇年代にアメリカが経済恐慌に見舞われた時期に、第三二代ローズベルト大統領はラジオ放送会社を規制しようとはしますが、NBCの「トスカニーニ・アワー」が国民に愛好されていることを考慮し、規制をしなかったとされています。

### テレビジョン放送に進出

音声の放送が社会に定着すると、今度は映像の放送が目標になります。この分野でもサーノフは先行します。まず手掛けたのが映画でした。一九二八年に映画関連の二社を傘下にRKOピクチャーズという映画会社を創設、最初はF・アステアとG・ロジャースが主演するミュージカル映画で有名になりますが、アメリカ映画史上の傑

作とされる『キングコング』（一九三三）（図3）や『市民ケーン』（一九四一）を制作して成功します。



図3 キングコングのポスター（1933）



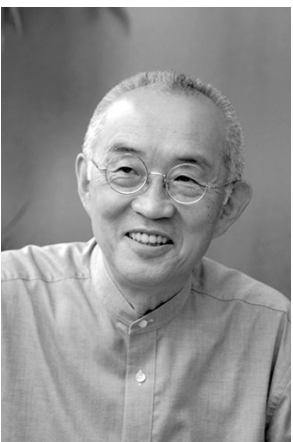
図4 高柳健次郎のテレビジョン実験装置（1926）

このような映像制作の能力を基礎に、それを映画劇場ではなく放送で全国に配信するためにサーノフはテレビジョンの開発に全力投球します。しかし先行したのはアメリカではありませんでした。画像を遠方に伝送する技術の開発は一九世紀後半に要素技術が開発され、二〇世紀前半になってロシアのB・ロージング、日本の高柳健次郎（図4）、イギリスのJ・L・ベアードなどが画像を電送することに成功しています。

そして一九二九年には英国放送協会（BBC）とドイツの国家放送協会（RRG）が実験放送に成功、一九三六年にベルリンで開催されたオリンピック大会ではテレビジョンで競技の中継が実現しました。アメリカは出遅れましたが、サーノフの努力でNBCが一九三九年に番組の定時放送を開始し、その功績によってサーノフは全米放送事業者協会（NAB）から「アメリカのテレビジョン放送の父」として表彰されています。

現在のデジタル方式以前のアナログ方式のテレビジョン放送は世界に三方式（NTSC/PAL/SECAM）ありますが、アメリカでは先行したCBSが独自の方式で一九五一年からカラー放送を開始し、NBCは出遅れて一九五四年からNTSC方式で放送を開始しました。サーノフの尽力でアメリカはNTSC方式に統一されましたが、現在ではデジタル時代に移行してATSC方式が統一規格になっています。

サーノフは七五歳になった一九六五年に事業を息子のロバートに譲渡して引退しますが、電気通信の新規技術が次々と登場した二〇世紀に通信業界と放送業界を牽引した偉大な人物でした。サーノフの時代は一人から一人への情報伝達（通信）と一人から多数へ情報伝達（放送）は別物でしたが、インターネットの出現により、この境界は曖昧になりました。サーノフが生存していれば大胆な情報社会を実現したかも知れません。



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。モルゲンWEBの連載「清々しき人々」より、『清々しき人々』、『凜凜たる人生』、『最新刊「爽快なる人生」（遊行社）など。